



出陣學徒に噓す

學長・法博 神戸 正 雄

諸君は今や御召を受けて醜の御楯となることに相成つた。筆を捨て本を閉じて銃劍に代へ、米英撃滅、大東亞建設の聖戰に馳せ参じようとして居る。諸君の光榮、諸君の満足、推察するに羨しい。しかし此光榮の裡に、諸君の双肩には祖國の興廢、東亞民族の榮辱が繫つて居る。之を夢寐にも忘れてはならぬ。しかし此重責、決して諸君のみが負ふのではない。國民の總員が分擔すべきものである。又、諸君のみが出征するのでない。殘留する學友も亦やがて

諸君に續くのである。しかし諸君が前線に立つの時、諸君が直接に敵と對抗するの故に其責任は確かに一層重い。諸君が此重責を果すの途は唯一つ、其は諸君が一切の世俗心、家の事、學校の事、其凡べてを揚棄して、一筋に大君と祖國との爲めに、與へられたる持場に於て渾身の力を振ふことである。諸君が御召を受けて皇軍の一員となつた其瞬間に、諸君は最早平凡なる人間を超越して神となつた自信を有つて下さい。私達も今日よりは最早、諸君をば私達より

も一段と高い位にある神として崇敬するものであり、諸君も之を受くるに耻ぢざる氣持を有つて下さい。そして戰場にて諸君の前に現はれるもの、其れが如何なる大敵であらうとも決して之を恐れず侮らず、死生を超越して戦つて戦つて戦ひ抜き、萬一戰の庭に倒るとも魂魄となつて戦友を加勢し續け必ず遂に祖國をして最後の勝利を得しめること、其れのみを念じて下さい。此事は諸君に於て既に已に覺悟の出來て居ることゝは信するが、茲に別れに臨み諸君の信念を深める爲めに一言して噓とする次第である。

大正十二年六月十五日創刊
昭和十八年十一月十日再刊
昭和十八年十一月十五日再刊
發行人 神 戶 正 雄
編輯 柳 瀬 兼 助
大東市北區安部
上三丁目十五番地
印刷所 西大 谷 口 印刷所
大東市大港區長橋
中道二丁目十二番地
發行所 關西大學學務局
會員登錄證號二〇六〇〇四

第二十四號 目要

學徒出陣に噓す	神戶正雄、村上喜貞、野村次夫、河村宜介(一)
戰果の二面	正井敬次、高橋盛孝(二)
報	柳瀬兼助(三)
報	菅 守常(四)
報	(五)
報	(六)

學徒出陣

豫科長 村上喜貞

戰線のをたけびのこゑ夜となく
聲となくわかき胸にひやくを
こゝろすでいくさびとなり大君の
火筒負ふべくまぢし日來る
けふの日をまぢにやまぢし教へ子等
おもかゞやかし營門に入る
日のごとくあきらけくこそ學徒行く
すめらみくにのものゝふの道
このみちをましくらに往けこの道は
千代よるづ代をつらぬける道
弓弦をば矢ははなれたりましくらに
ゆきていはほをとほさぐらめや
大棧威あまねき海にあめりかゆ
よせては水漬くおぞの黒船
たけをらが鎧のそでの一觸りに
あたのことごとくちはらふべし

光榮を祝す

法文學部長・教授 野村次夫

いよいよあと二十日餘りで諸君は入營されるのである。學部に入學されてより長きも一年八月、短きは僅かに二ヶ月の學習を以て諸君は校門を去られるのである。二、三年の學生諸君には休暇明けの恒例の學内清掃作業と本年特別の防空貯水池作業とをやつていただき、次で協力令による學外への出勤を願つた上、ゆつくり授業も受けてもらひたかつたし、勉強もしていたよきたく思つてゐたところへ今回の非常措置方策の機裏であつた。が今更豫定を變更することも出来無いので作業も出勤もそのまゝこれを斷行した爲め、漸く授業が軌道に入つたかと思ふとすぐ又徴兵検査で歸省する者も多く、出席も不揃であつたが、一兎に角授業はこれを繼續し今日までやつて來た。かような際に今更授業でもあるまいといふ風に考へる向もあつたかも知れないが澤山の學生のことであり、徴兵検査の日取も人により違ふので差支なき者は何時でも登學して授業を受け得るやうにしておいた方がよいと思つて、左様に手配し且つ各先生には入營學生を主眼として講義をしていただくことをお願いした位である。幸にして数は多くなかつたが徴兵検査當日を除き毎日登

一週間は私達も學生諸君と絶えず行を共にし、唇を一つにして心から諸君の光榮を祝し且つその行を壯んじたいと思つてゐる。その後の十日間は十分休養し、準備萬端足りなくおちついて晴れのお召を待ち、十二月一日には必ず一人も残らず無事入營せられんことを念願してやまない。切に諸君の武運長久を祈り、他日再び同一學園にて相見の日あらんことを望んで止まない。(昭一八・一一・八)

戰場こそ道場

經商學部長・教授 河村宜介

出陣學徒諸君

戰場は全く重大化して來た。眞に日本は興廢の岐路に立つてゐる。進んで大東亞建設の理想を達成するか、今日の刻一刻が決定しつゝあるのである。この重大時局に際會して、華きに政府は劇的な國內態勢強化の大綱を示し戰爭完遂の決意を新にすべく國民に呼びかけたのである。これはまさに歴史的な國民動員の斷行といはねばならぬ。然し、既に二年前、米英に對して宣戰しながら、斯くの如きことが、今日まで起らなかつたことは、寧ろ不思議といはねばならぬ。これは、偏に大

より、緒戦において大戦果を收め得たため、事態の緊迫が、今日まで猶豫せられたに過ぎないのである。然るに、今や國民動員の徹底を期して、學生の一般徵集猶豫を停止せられ、近く諸君は、名譽ある帝國陸海軍々々として、懐かしの學園を後に夫々勇躍第一線に赴かれることになつた。今こそ諸君は朝な夕な畏み奉つた教育勸語の「義勇奉公」の大義を實踐し奉る時期が來たのだ。諸君の本懐、學園の榮光、之に過ぎるものはない。こゝに謹んで衷心より祝意を表する次第である。出陣の日迫つた今日、諸君の心境果して如何、思つてみては如何である。恐らく

純一無雜、たゞ「今日よりは願みなくて」の古歌の心が、生死を越ゆる盡忠の精神が、ひしひと胸にたぎるのみであらう。諸君の覺悟は、既に十分に出來てゐると思ふ。今更ら長い言葉を以て、之を激勵する必要は毛頭無いと信ずる。たゞ闘つて、捷つて、勝ち抜いて、敵米英を壓倒撃滅することあるのみだ。多年千里山原頭培植來つたその逞ましい肉體と闘志とを以て、彼をあくまでも殲滅して、全國民の期待に背かざらんことを祈る。さりながら筆の代りに劍を執り、教室から直ちに戰場に赴く諸君は、これによつて學道を中斷すると考へてはいけない。今日の戰場こそ、眞に諸君に與へられた最上の道場である。そここそ諸君の生甲斐もあり、死甲斐もあるところであらう。而も今の戦は、もとより前線も統後もないのだ。従つて征くものゝ責任も重大であるが、残るものゝ責務もまた深甚である。われわれもまた諸君と同じ心で、銃後にあつて一層學問の職ひに戦ひ抜くことをお誓ひする。どうぞ安心して征つてくれ給へ。皇恩の萬一に報い奉らんことを堅く決意して、今や學園を去りゆかんとする出陣學徒諸君を送り出さんとする時にあたり、諸君に感概切なるものがある。唯武運彌海上に諸君の上に健からんことを祈つて、いさゝか鼓の言葉とする。

誠心こそ

専門部長、經博 正井敬次

軍人勅諭に、忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五ヶ條が示され、その終りには、「さて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ」と仰せられてある。

誠心とは、いま當に學徒諸君の胸にもえ立つて居る盡忠報國の精神のその奥そこに在る心である。それは言葉に云ひ現はされない、また説明を必要とせない所の、大きく深く且つ清らかなる心である。

併し誠心の意を言葉に現はす必要がある場合、諸君は之を次の如くに言へばよい、曰く「誠心とは神に従ひ來るの心である」と。神とはわが國にては

壯行の

高橋盛孝

専門部生徒主事・教授 高橋盛孝

我々は勝たねばならぬ。上

叡慮を安じまらるる爲に。幾多の英魂を慰する爲に。美しい國土を保全せんが爲に。十億の東亞の民の要望に應へんが爲に。

近き將來に平和が來るであらう。しかしその平和は、完全な武裝下の平和

なければならぬのは勿論だが、何よりも人間を送らなければならぬ。しかも日本人を、大和魂を送らなければならぬ。たとへ東亞共榮圏の一角でも、敵

出陣學徒諸氏におくる

専門部生徒主事・教授 柳瀬兼助

今や諸氏は學半ばにして校門を出て銃を把られんとしてゐる。憶へば世界の二大強國米英を相手として大東亞十億の民を暴戻極りなき之等二國の極權より解放して八紘爲宇の大理想を實現せんとするときに當り、肉體的にも智能的にも、當に軍の指導者に立つべき諸氏が、今に至る迄獨り安んじて學に従事し得たことは教育に大御心をよせさせたまふ御聖慮によるものと深く感銘しなければならぬ。

然るに事態は日に日に急迫をつけ彼等米英を徹底的に破砕すべき時機は到來し、諸氏の上に既に大命は發せられたのである。一時はあまりの急に或は動搖を來された諸氏も今日に至つては冷静に立ちかへられたであらう。有史以來未曾有の否將來にも絶對になき大東亞十億の民の解放、東亞共榮圏の建設、世界永久平和の確立の礎石を諸氏の一人一人が築き得る好機に諸氏は會

の泥足に汚されてはならぬ。完全に敵を威壓する迄は押しの一手法。行け我が學徒。筆を投じて、火の玉となつて敵陣めがけて飛び込め。

したのである。この好機會に於て、この大任を全うし得る地位にある諸氏が安閑として過さんか恐らくは悔を千載に残すに至らう。諸氏の出陣の目的は昭かである。この點に於て既に戰爭目的の發見に苦しむ敵米英學徒に比し精神的に諸氏は勝利者である。

時宛も諸氏の首途を視するが如く東京都に於ては大東亞會議開催せられ大東亞共同宣言の發表あり、南太平洋に於てはブーゲルベル島沖海空戦に於て偵察機頭以上の大戦果あり。諸氏の前途や誠に多幸と言ふべきである。私は敢て諸氏に生還を期せずとの覺悟を求むる者ではない。否あくまでも生き生きて一つでも多くの大東亞建設の礎石を築いて戴き度い。

征け、親愛なる我が學徒諸氏よ！母校學園の名譽を荷ひ祖國の榮譽の爲に！大東亞共同宣言顯現の爲に！

調武神

戰果の二面

教授 菅 守 常

ブーゲンビル島沖航
空戦の連続的な大戦果
に對して、私たちは深
い感謝の念で一杯である。

大東亞戦争によつて、世界地圖は刻々と書き改められつゝあることは萬人の
みとめるところである。しかしこれと
共に、形にあらはれることなくして、
書き改められつゝある精神的地圖の
刻々の變化、その未曾有の成果につ
いても、私たちは深い思ひをいたさ
なければならぬのである。世界精
神の歴史の上に加へられつゝある全
く新しい成果をはたして萬人が萬人
共に明確に自覺してゐるのであらう
か。

あらゆる道徳の基礎には、死と云ふ
事實が潜んでゐる。死に對する態度の
うちに、究極の人間精神の本質はあら
はにあるのである。ところが、この死
に對する對し方に於いて全く從來と異

つた見方を、英米及世界一般にはじめ
て明確に日本の荒鷲は身を以つて、教
示しつゝあるのである。忠臣蔵をどう
しても理解し得ない敵國人も、今度は
彼等の全存在を左右せられる危機に於
いて、眞に日本精神が何であるかを、
身をもつて痛感せずにはゐられなくなつ
てゐるのである。彼等は驚嘆と羨望を
もつて、この精神上の雷撃を空しく拱
手傍觀するに止まつてゐるのである。

それは全世界への新しい啓示なので
ある。何等の神秘感をとまなはざる、
あらはな啓示なのである。こゝには終
末觀的激情のひき起す何等の精神の混
濁は見られない。云はゞ一切の感傷を
離脱した、精神の素地そのものゝ美し
さがあるのみである。

ブルー・タウトは伊勢神宮に建築家
として最大の讃辭を惜まなかつた。し
かし彼は、どこまでも建築家に止まつ
た。道徳的世界、形而上學的世界に形

なくして、うちたてられつゝあるこの
日本精神の殿堂の光輝を眞に悟ること
は所詮我々日本人以外には不可能なの
である。

こゝに新しい精神の創造面が示め
られてゐる。それは世界精神の新しい
展望なのである。我々日本人が眞に
この道徳的精神の世界に於いて、世界
に新たな可能性を示めしつゝあると
云ふ誇りを各人が自覺するとき、各人は
自己の持つ責任の重大さと、その使命
の氣高さに身のひきしまるのを覺えず
にゐられないであらう。

かくの如き誇りを我々日本人の各々
が持ち得ると云ふ輝かしい賜物を、我
々はこれら戦果のかけに黙々としてつ
とめ、また散つて行つた勇士等に負ふ
てゐるのである。この負ひ目は、つく
なひきれる底のものではないのであ
る。それは海を越え、空を越え、あら
ゆる電波よりも、はげしく、強く、我
々の心をうちつゝあるのである。それ
を感受するためには、ラヂオ・ロケイ
ターなどは無用なのだ、そしてまたア

メリカにおとらない數の飛行機を増産
したとしてもこの負ひ目につぐなひ得
るものではないのである。

學徒壯行會が中の島公園で催された
とき、私は以上のやうなことを考へて
ゐた。壯途につかれる學生諸君の引き
しまつた、考へ深い、瞑想的な顔たち
深くみづからの心の在り處をつかみ握
えて置かうとする精神の眼差し、こゝ
にもまた精神の世界に於ける私たちの
先達の面影にぶつかつたのであつた。
これらの學徒諸君の肩には、現實の戰
士としての任務と、世界精神の開拓士
としての任務と、二つの任務が負はさ
れてゐる。しかも、この二つのうち
どれ一つとして、我々残るものはきび
しい負ひ目としての教示でないものは
ないのである。

壯行會も、大本營發表も、あまりに
きびしいものであることを感じると
き、私たちがみづからに、ちかはなけ
ればならないものを、しつかりとたし
かめてゐなければならぬと思ふので
ある。



學 內 報

臨時協議員會開催

去る十一月四日午後四時より新大阪ホテルに於て臨時協議員會開催、懸案の理工學科設置につき協議の結果新設に決定し、寄附行為第一條「本財團法人へ文學法律經濟及び商業ニ關スル學科ヲ教授シ及ビ攻究スルヲ以テ目的トス」とあるを「……文學法律經濟商業及ビ理工學科ニ關スル學科ヲ教授シ並ニ攻究……」と變更した。而して理工學科については差當り専門部に明年四月開校の豫定にて、協議員中より五名の委員を擧げて理事者に協力することゝなつた。

尙法文科系學生の徵集猶豫制度廢止による學内狀況、私立大學の統合整理の問題、本學の之が對策につき協議並に意見の交換を行つて七時散會した。

尙特別委員は、板野友造、遠部逸太郎、松本静更、松本茂三郎、村尾静明の五氏が選任された。

特別講義實施

徵集猶豫廢止による十二月入營の在學生に對する特別授業は、學部に於ては、擔當教授に於て夫れ夫れ特別講義を行ひ

資料に於ては十月八日より廿三日迄午後教線を主としたる特別教育を實施し、専門部に於ては左の編成により夫れ夫れ特別講義を行ふ。

専門部第一部(十一月九日、廿日)

- 勸諭講話(正井部長) 訓話(高橋教授)
- 民法の問題(福島教授) 親族法の問題(柳瀨教授) 刑法の問題(植田教授) 民族と資源(中川教授) 財政の問題(三谷道教授) 經濟史話(佐伯教授) 統計の話(高木助教) 思想戰問題(川上教授) 武士精神(安川教授) 文學講話(片岡教授) 教練(學科及術科) 教練教官
- 専門部第二部(十一月十三日、廿日)
- 勸諭講話(正井部長) 訓話(高橋教授)
- 民法の問題(山木戸教授) 親族法の問題(柳瀨教授) 民族と資源(中川教授) 商法の問題(國藏教授) 武士精神(安川教授) 哲學(菅教授) 文學講話(片岡教授) 教練(學科・術科) 教練教官

學徒出陣報國團行

- 一、一日入營十月廿日二十二部隊(豫科)
- 一、武運長久新願行軍十一月七日廣田神社參拜、野里、廣田神社間十六キロ行軍(専門部一部及二部)
- 一、軍事講演座談會十五日於威德館(學部・豫科)
- 一、大學高專聯合壯行會 十六日午前九

開年より伊勢神宮正式參拜(十一月十二日)り天神橋―内木町間分行進(學校報國隊大阪地方部主催)

一、伊勢神宮正式參拜 十七日神戸學長

は伊勢神宮に正式參拜して出征學徒の武運長久を祈願し、皇大神宮豐受大神宮の御守を拜受し、来る廿日假卒業證書授與式當日の壯行式に於て出陣學生生徒に謹みて頒布を行ふ。

一、射擊大會 十七日大阪陸軍城南射場(學部)

一、武運長久新願行軍 十八日桃山御陵參拜―行軍十二キロ―石清水八幡參拜(學部)

一、壯行式 二十日午前十一時(學部豫科) 午後二時(専門部)

人事異動

- 講師囑託 板木 郁郎
- 同 磯崎辰五郎
- 同 難波 紋吉
- 同 岡本 至
- (以上十月一日付)
- 依願解職 書記 小笠原佐守
- 任教授(専門部勤務) 講師 吉永 登
- (十月廿三日付)
- 依願解職 専門部圖書課主任 山田千吉
- (十一月四日付)

依願解職 教諭 西山 謙二 (九月十六日付)

任教諭 井上 薫 (九月十七日付)

任教諭 筋萬 重雄 (九月廿日付)

二 商 辭 令

依願解職 教諭 狹間 一夫

免庶務主任命教務主任 教諭 神保敬男

命庶務主任 教諭 端山 義正 (以上十月廿一日付)

研究論集近刊

研究論集第十四號法律政治篇は「日本法學特殊問題」經濟商業篇は「大東亞共榮圈經濟問題特輯」(二)として来る十二月月上旬發行の豫定である。尙文學哲學篇は多少遅れて發行される。

かくほう抄

- ▽神戸學長 十一月十一日東京、帝國學士院會議、學術振興會委員會に出席
- ▽矢口専務理事 十一月十九日發上京、文部省
- ▽日本語學振興會經濟學特別學會は十一月九、十の兩日神戸商大に開かれ、正井、矢口、藤川教授出席
- ▽日本經濟政策學會 十一月七、八兩日神戸商大に開催、藤川教授出席
- ▽里見書記(専門部學生課勤務) 應召

評議員會開催

十一月十一日午後六時より天六會舎三階會議室において校友會評議員會を開催會長神戸學長は上京中にて學校側より内藤正剛理事出席、樫本常任幹事司會にて國民儀禮のち、内藤理事の挨拶について、校友總會決議實行副委員長木下清一、耶氏より理工科設置問題に關する實行委員會の活動につき詳細なる経過報告し、三委員より補足説明あり、大學當局に於ていよいよ理工科設置に決定したる以上、その實行に全幅的協力をなし、早急に實現されんことを希望した。尙私立大學の統合に當りては教育報國の赤誠の進るところ經營の犠牲的負擔は寧ろ校友に於て進んで引受くべしとの熱望あり、國策の方針に従つて具體的なる成案を急ぐこととなり、母校愛の進るところ活潑なる意見の交換があつた。尙實行委員には理工學科の設置問題に限らず、現在生起する學校問題につき検討することを委託し「校友會評議員會は實行委員の努力を謝し初期の目的貫徹に邁進されんことを望む」との決議をなし午後十時散會した。

實行委員會報告

理工學科設置に關する校友會總會決議

に基く實行委員は本誌前號に掲載したが左に委員會並に活動概況を掲ぐ。

▽第一回委員會 十月七日午後六時、委員會の大綱活動方針協議、副委員長に松本茂三耶氏、幹事に木下清一郎、春原源太郎の兩氏委嘱、出席十四名。
▽第二回 十月十四日午後四時、吉田、内藤、矢口の三理事を迎へ、總會決議手交、理工科設置に對する理事の意見を聞き、實現方法につき意見を交換し毎理事會に委員會より三名出席することとなる。

▽第三回 十月廿一日理事會に松本、木下、春原三委員出席、午後六時より委員會、學長の齎せる文政方針を聴く、専門部に機械科設置に決定の趣、次回理事會に新に委嘱の小川平治、岡田清作、前田信之助の三氏加ふること、出席者十一名。

▽第四回 十月廿七日理事會に松本、木下、前川、春原の四氏出席、午後六時委員會、出席者十三名。
▽高工見學 十月廿九日府立堺高工、官立堺高工見學、十三名。

▽協議員會見 十一月四日新大阪ホテルに於ける協議員會前、理事協議員と會見し、實行委員會の意見を開陳、十二名。

▽第五回 十一月九日、委員會の組織檢討し、今後の打合をなす。松本副委員長委員を辭し、副委員長に木下清一郎、楠野泰夫兩氏、幹事に春原源太郎、阿部基吉の兩氏委嘱、出席者十一名。
▽第六回 十一月十一日、評議員會に報告事項打合せ、十五名。

半島學生蹶起出陣 激勵隊派遣

(朝鮮支部)

法文科系學徒の徴兵猶豫撤廢に呼籲し半島臺灣學徒に陸軍特別志願兵制度が實施せられて異常の感激を以て迎へられてゐるが、校友會朝鮮支部にては母校在學學徒の蹶起を促しその行を壯にする爲先輩校友鈴木勲(昭十二大政)、松村雄烈(昭十一專二法、十四大政)、田村暎一(昭十六專一商)の三君を派遣した。三君は十一月十日京城發上阪し、學部豫科並に専門部に於て、在學生の激勵懇談會を開催したる處、偶々ブーゲンビル島沖航空戦の大戦果についての大本營發表あり、皇軍將士の敢闘に感激して出席○名總員即刻出陣手續を完了し、米英撃滅に雄々しく蹶起出陣するの若き學徒の意氣を示した。

秀麗會 (關東州支部)

九月廿日午後六時より寺内通海務協會食堂に於て秀麗會第八十九回例會を開催當日集る者高濱支部長始め十一名、和やかな雰圍氣裡に終始し午後八時半散會。出席者：高濱直一、飯田昇、秀島全治、黒田健勝、松本茂、松田久雄、北條茂義、濱本進、荒川彌一郎、竹若隆三、小川立朝。

五緑會總會

昭和五年度學部卒業同窓生より成る五緑會は十一月二十八日より西區土佐堀船町、大新樓に於て久し振りに總會を開催し相互の連絡友誼をより一層計り時局に對應す可き諸種の意見を交換し最近の理工科設置問題の情勢等及び懇談を重ね二十一時盛會裡に散會した。出席者：岩田浩太郎、御堂河内四市、石塚英一、白井敬史、門脇治郎、島田信一、森田義治、河野吉治、鈴木武夫の九氏。(幹事鈴木武夫報)

會員消息

大法 安藤 智惟(16前) (北ボルネオ) クチン市、日沙商會) 安藤 直宏(16前) (新京特別市安民廣場、新京區法院審判) 荒川 席一郎(8) (北河内郡豐屋、川町泰七)

岩窪 一雄 (一四) 此花區傳法町北一ノ八

大石 大典 (15) (福井縣武生町、縣立武生中學校教諭)
大田 宗利 (16後) 哈爾濱市南崗區海城街八一號、鶴田方
荻野 武男 (9) (新京關東軍司令部付、四、主計少佐)

河野省三郎 (14) (新京特別市大同大街國務院地政總局事務官)
小池照太郎 (6) (開東省新安區大和路一二牌二三號、開東省木材配給會社)
小坂 克己 (10) (東京都麹町區丸之内二ノ一八、日滿商會社東京支社)

緩野進一郎 (12) (延慶縣城內東大街、蒙彊銀行延慶分行國庫主任兼庶務主任)
大田 義三 (8) 上海長春路秀坊六號
國府寺辰美 (13) 黑河省河興隆街二四ノ五ノ三、朝日新聞黑河通信部

大西 忠三 (16後) (大阪府會計課、鎌田信之(16後)香川縣小豆郡西村日方加治 勇 (14) 神戸市灘區矢部町一一一 一松岡汽船會社會計課
田村 英一 (16後) (高千穂電機會社)
西川 一行 (14) 神戸市灘區高羽楠兵充三宅 豐之 (10) (哈爾濱市王兆屯、滿洲馬車公會哈爾濱賽馬場)

岩窪 一雄 (一四) 此花區傳法町北一ノ八

植田 二郎 (三) (藤田組東京事務所)
大江久五郎 (五) (任地方事務官、命大阪府勤務)
大塚 重延 (2) (ベルマラングーソ市フエーヤ街七、橫濱正金銀行關負支店)
金原 正雄 (4) (平安北道產業課)
河崎義雄 (三) (瀨下製作所常務取締役)
小林儀三郎 (明40) 香川縣觀音寺町 (不動貯金銀行參事)
生水 邦夫 (15) 京都市東山區木町通五條上ル森下町五三〇
勢渡 運男 (二) (北海道紋別郡遠輕警察署長)
瀧野 靜一 (10) (日本厚生產業會社生產部長)
高見 明夫 (14) (大阪遞信局業務部郵券課)
土岐 浩茂 (16後) (東京都澁谷區幡ヶ谷原町八八九、東京電氣商會)
鳥羽 秀雄 (3) (奉天市大和區八幡町滿洲貿易會社常務取締役)
仲 俊夫 (13) 神戸市兵庫區湊町二ノ一九三、小山方
長瀬壽壽治 (5) 小樽市宮岡町一ノ五二
西村日吉慶 (16後) (辯護士候補、中壘秀太郎法律事務所)
野口 正男 (10) 天王寺區空堀通二ノ四七 (三和製作所)
蓮井 敏雄 (9) 東淀川區三津屋南通二ノ一四 (日本コンデンサー會社)
藤井 正信 (四) (廣島鐵道局總務部補償課長)

藤木武次 (15) (新京日本大使館朝鮮課)
松浦一夫 (三) (東京鐵道山統制會礦石部)
丸山 昌孝 (13) 明石市西新町四ノ七五 (建築設計)
三宅富三郎 (三) 東區豐後町三二、日出興業會社大阪支店
矢野 義一 (三) 堺市濱寺町船尾三三四
山口 敦一 (14) 香港占領地總督部(ハ)
山崎 義輝 (五) 兵庫縣武庫郡住吉村大學梅木八二四ノ三
山本 稀一 (五) 地方警視旭警察署長
吉本 道孝 (13) 高松市東瓦町二、朝日新聞記者

井山 力 (6) (東區南本町四ノ五一日本板紙元賣商業組合西部支部)
大出 一俊 (16後) 神戸市灘區灘南通一ノ二四 (淺野物產會社神戸出張所)
阪倉 久治 (4) 芦屋市打出荒地一〇、(藤貫工業會社常務取締役)
杉本殿 (8) (石産精工會社業務課長)
仙崎 憲治 (11) 去日浴崇子鎮と華燭の典を擧ぐ東京都江戸川區小岩町一ノ五七
中谷 定治 (三) (滿洲國濱江省珠河街滿洲拓殖公社珠河出張所長)
西本 信三 (3) (朝鮮平北縣川郵便局私函第一號、藤田組安樂礦山)
平澤 農一 (13) 北京內三區東四牌樓三條胡同五號、北支那製鐵會社
松本 石翠 (8) 東住吉區鷹合町一七六ノ一 (市電氣局厚生課)
山下 松吉 (2) (朝鮮咸鏡南道端川郡北斗日面、日本鑛業會社)

井上 光行 (昭16大法) 南方に奮闘中病を得十月廿四日於東京第二陸軍病院戰病死さる。遺族生野區新今里町六ノ九 (父) 井上延藏殿。
池 志恕 (昭10大商) 於ニユーギニヤ壯烈なる戦死をさる。遺族住吉區萬代西二ノ二六、島田方(後)池 信子殿
谷 健二 (昭16專二經) 十月廿三日於篠山陸軍病院戰病死。遺族兵庫縣川邊郡小浜村南池田二(父) 谷 治作殿。
水谷留次郎 (昭13大政) 去る五月廿九日於アツツ島散華。遺族天王寺區南日東町五(父) 水谷敏次郎殿。
南 富雄 (昭16專一商) 陸軍少尉八月卅一月於南方戰病死。遺族此花區朝日橋通三ノ六四(父) 南 善藏殿。

改姓名
鈴木 清 (16後) (交易營團大阪支部)
東條 正美 (13) (上海閩北青雲路一〇號、松下電業會社)

計 音
昭16大法 伊藤 正紀 高木 正紀
昭16專二法 高橋 義雄 山路 義雄
昭18大法 高橋 義雄 山路 義雄
昭15專二商 西村 孝男 高桑 孝男

藤井 正信 (四) (廣島鐵道局總務部補償課長)

藤井 正信 (四) (廣島鐵道局總務部補償課長)

校友會費拂込者氏名 (四)

池之内三郎	淡	敷男	宮脇	章	山本	正	寺見	利一	徳千代又一	中井	義友	仲	俊友	押海	殷一	加賀	實	加藤	克也	
石垣喜申	高桑	孝男	林	喜一郎	古富	清	長壁	友市	八田	幾藏	樋口	誠亮	平山	敦司	香川	殷一	加賀	實	加藤	克也
山木	一	郎	吉村	泰助	渡邊	八尾	忠章	村尾	信次	川田	隆夫	唐渡	康之	門田	節二郎	川田	三郎	川島	三郎	三郎
安部	清	山本	赤尾	信敷	秋定	裕	青木	一雄	正夫	神田	邦之助	木田	嘉晴	木村	亮作	木村	亮作	木村	亮作	木村
青山昇太郎	秋吉	勇	淺野	博	武司	荒井	一	東	武	岸田	行雄	北川	富雄	北村	利郎	喜多	翁次	喜多	翁次	喜多
井上	重雄	陽	網野	武司	荒井	一	東	武	岸田	行雄	北川	富雄	北村	利郎	喜多	翁次	喜多	翁次	喜多	翁次
伊藤	四郎	岩男	池田	新一	石原	正泰	石村	康男	坂口	誠	坂田	信三	後藤	幸三	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏
井野	善夫	伊勢	伊勢	武	伊勢	隆雄	伊藤	英二	國谷	澄雄	後藤	幸三	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏
井田	來造	井田	井田	清一	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男
井田	來造	井田	井田	清一	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男	井田	幸男
伊藤	四郎	岩男	池田	新一	石原	正泰	石村	康男	坂口	誠	坂田	信三	後藤	幸三	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏
伊藤	四郎	岩男	池田	新一	石原	正泰	石村	康男	坂口	誠	坂田	信三	後藤	幸三	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏
伊藤	四郎	岩男	池田	新一	石原	正泰	石村	康男	坂口	誠	坂田	信三	後藤	幸三	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏	佐藤	孝藏

(以下省略)